語釈 ： インターネット Twitter 上でみる Trump 前米大統領の英語（57）
(A Basic Way of Reading Trump-Language)

後　藤　　寛

英語や Basic (Panoptic English：PE)が身につくようで実は意外に身につかないのが sentence unit（文単位）で見ていることである。まったくの一例であるが単一文 I will give you a book.は意味をなすか？現実には答えは“No.”である。unmarked（無標）の文であり、意味は固定しないわけである。また、dialogue（対話形式）文もしかりで意外に流れが散漫する。やはり固定した text unit（テクスト単位）で内容が丸わかりとなったら反復読みで thought pattern（思想パターン）を internalize（内在化）するのである。今日的な text linguistics（テクスト言語学）であり、「分かる→覚える→使える」である。今回も英語の ‘panopticon’ がどのような仕掛けとなっているかその内部を覗いてみる。

なお、pattern recognition practice を単に psittacism（シタシズム・オウム返し）と認識されていてはならない。psittacism(< psittac = parrot)には reference（指示）がなく the Triangle of Reference「意味の三角形」は不成立。“Psittacism is the use of words without reference；…”〔Ogden-Richards, *The Meaning of Meaning* (p.218)参照〕。

ここでは good / bad の binary opposition（識別関与的２項対立）論理が明確な第 45 代米国大統領 D. Trump 氏の英文を text unit で endophoric / exophoric references（内部・外部照応指示）等々の視点から見ている。米国の大学でアメリカ人による Trump 氏の tweet text に関する言語学学位（博士）論文例もあることを本連載(50)で触れたが、本連載稿では初回からすべて基本的で本質的と思える事項を平易に扱っている。

今回は(1)で米・イラン関係、(2)で独立記念日の祝い、(3)では White House のスタッフたちの仕事ぶりに関するものをさらに時間をさかのぼりスペイン語対照で追ってみる。

(1) Iran has just issued a New Warning.　Rouhani says that they will Enrich Uranium to “any amount we want” if there is no new Nuclear Deal.　Be careful with the threats, Iran.　They can come back to bite you like nobody has been bitten before！　(July 3, 2019)

▲Trump 大統領の在任１期目の 2019 年春から夏にかけ特別に、対イラン情勢が緊迫していた。イランが新たな警告を発し、H. Rouhani 大統領（当時）は新たな取引がないなら濃縮ウランは“どれだけでも望みどおりの量”を保有できると言っているが「イランよ、脅しは要注意だ、これまでにないとんでもないしっぺ返しがあるぞ！」という内容。

この少し前には原油の輸送路であるホルムズ海峡(Strait of Hormuz)近くで日本のタンカーが攻撃され、米国はこれはイランの行為だとした。また、ホルムズ海峡付近の国際空域を飛行中の米軍無人偵察機をイランが領空侵犯し撃墜したとし、米国は軍事的報復を考えていた。他にもここで似た事件が起こった。一方、この時期に MAGA との語呂合わせで MIGA (< Make Iran Great Again.)と書かれた親イランの標語も Net 上に出た。

*原油の輸送路ホルムズ海峡

strait（海峡）は Basic 語 **stretch, street, straight** と同系で、「広げること・広がる

こと」が原義である〔拙著(2016)「松柏社」、第二部、例(97)参照〕。

文中最初の太線語 issue は本連載(33)の⑵で詳述した。「何かがピュッと発する」という語感がある。[íʃu:]の語頭音[íʃ]は接頭辞 ex (= out)の意味ともつながっている。

次の太線の語 bite（噛みつくこと）は本連載(17)の⑵, (31)の⑴で見たが Basic 語 **bite, bit, bitter, boat**（boat は水を噛んで進むもの）はすべて同系である。un-Basic 語の bait（えさ）、beetle（カブトムシ）なども「噛むこと」が原義で同系（'beetle'は EP 本 III, p.48 で提示された）〔同上拙著、第二部、例(38)参照〕。

⑵ ・HAPPY 4 TH OF JULY！ (July 4, 2019)

・Weather looking good, clearing rapidly and temperatures going down fast. See you in 45 minutes, 6:30 to 7:00 P.M. at Lincoln Memorial！ (July 4, 2019)

・A great crowd of tremendous Patriots this evening, all the way back to the Washington Monument！ #SaluteToAmerica (July 4, 2019)

▲３例とも毎年恒例の米国の独立（1776 年 7 月 4 日）を記念してのものである。最初の例の日付で「独立記念日」の意味となる 4th of July 中の 4 TH OF の TH OF の部分は [θə] 音となり、実際には ['fɔɚθəʤə'lai] と発せられるのが自然に響き[θəv] は不自然。

文中３つ目の太線語 rapidly の rapid（速い）は印欧祖語 PIE の音素形が/REUP/とされ原義は「サッと奪い去ること」である。プラスαBasic 語 *robe*（衣服）とも同系である。*robe* は元来が「奪い取った衣類」のことで身にまとう衣類は何かと人間の歴史上で興味深い背景をもっていて、本会 *Year Book* No.69 (2017), No.73 (2021), No.74(2022) で扱った〔特に No.74 では R. Barthes（R. バルト）に注目し fashion（モード・ファッション）の視点から詳述した〕。un-Basic 語 rob（奪う）、rape（強姦）、raven [réivn]（略奪する）、ravage（荒廃・破壊）などとも同系。

また文中下線部 -ing や、-ly, -ed の suffix（接尾辞）による手早いメモ書き式英語に慣れたい。なお、rapidly の-dly の [dli] 音がここでも現れる〔本連載(45)の⑵など参照〕。

文中での P.M.の大文字化は掲示などでは用いるにしろ、小文字書き a.m., p.m.が正式。

最後の例では独立記念日で群衆の動きを追った遠近法となっている。Washington, D.C.のリンカーン記念館からワシントン記念塔のほうを見た光景である。なお、Washington, D.C.(= the District of Columbia)はどの州にも属さない米国連邦議会直轄のコロンビア特別区のことであるが、Washington はもちろん初代大統領 George Washington から、そして Columbia は Columbus（コロンブス）の名に由来する。

南米の Colombia（コロンビア）も Columbus の名に由来するスペイン語の国名である。スペイン語では英語の Christopher Columbus は Cristóbal Colón である。

こういう proper noun（固有名詞）に関し Ogden-Richards は *The Meaning of Meaning* で language and the mind（言語と脳）の観点から臨床的な amnesia（健忘症）や aphasia（失語症）に注目している。言語脳の衰えは "It first affects proper names."「まずは固有名称が侵される」という点にも注目しているが(pp.218-219, footnote)、幼児はまずは事物の names（名称）を覚えるがヒトが加齢とともに忘れるのもやはり names からか？

文末の太線語 monument（記念塔）は語頭 monu の音['mɔnju]からも直感したい。本連載(20)の⑵、(27)の⑵ですでに触れた Basic 語 **mind, memory** などと同系で、プラスαBasic 語では *mathematics*（数学）なども同系。un-Basic の monster（怪物）、demonstrate（見せる）、dimension（次元）、meaning（意味）、demensia（認知症）などすべて共通な原義は「心に思い浮かべること」〔同上拙著、第二部、例(28)参照〕。

〔以下、スペイン語翻訳版もある tweet (2018.01- 05)より ― ２言語対照〕

(3) Thank you to General John Kelly, who is doing a fantastic job, and all of the staff and others in the White House, for a job well done. Long hours and Fake reporting makes your job more difficult, but it is always great to WIN, and few have won more than us ! (January 23, 2018)

cf. Gracias al General Kelly por su fantástico trabajo, y a todo el Equipo en la Casa Blanca, por un gran trabajo. Horas largas e información falsa que complican el trabajo, pero siempre es bueno GANAR, y ¡ nadie gana más que nosotros ! (23 de enero, 2018)

▲一時、John Kelly 首席大統領補佐官が Trump 大統領をよく補佐していた。ここでの job とはたぶんメキシコ国境の問題と関わるものであったと思う。議会で時間がかかると同時にまずい報告が仕事をしにくくしているが、共和党の勝ちとなるという内容である。

太線語 staff も本連載(20)の(2), (52)の(1)で引き合いに出した。Basic 語 **stick** などと同系で「棒のこと」である。staff は原義からすれば、いわば「用心棒」ということになる。謎掛けなら、「staff と掛けて何と解く？」、「Basic 語の stick (棒) と解く」、「その心は？」→「用心棒・相棒である」などとなる〔同上拙著、第二部、例(5)参照〕。

もう１つの太線語 reporting の report も本連載(39)の(1)で名詞 N として「銃声」の意味にもなる語だと言ったが、語根部の port は「運ぶこと」が原義で report {re (= back) + port (= to send)}で、これも確認しておきたい〔同上拙著、第二部、例(66)参照〕。

下線とした makes は make でなくてもよい。cf.スペイン語のほうは単数扱いなら complica(< complicar = to complicate)であるが、複数扱いで complican とされている。

他言語のスペイン語から同系語を確認すれば general, fantástico, larga, hora, falsa, más は、英語の **general**, fantastic, **long**, **hour**, fake, **more** (< **much**)と対応し互いに同系語でもある（太字体は Basic 語）。なお、スペイン語のほうの blanca (= white)は英語の blank など、また trabajo (= work)は英語の *travel*, travail（骨折り・苦労）と同系語である。プラスαBasic 語 *travel*（旅）の原義は「骨折って働くこと」であった〔本連載(3)の②参照〕。さらにまた、スペイン語の gran, información, ganar, nadie はそれぞれ同系語として英語の **great**, information, gain, **nobody** (no + body)に対応する。

音声面からまたも特別に子音[l]と半母音[r]に注目しておきたい。本連載(52)で両音ともに耳を開くためにはまずは徹底的に語頭・語中・語末に現れる子音[l]にのみ注目し、[l]音のように響かないほうが半母音[r]だと思えばよかろう旨を言ったが、上の(3)の tweet 文中でこの２種の音の現れるすべての箇所を確認してみる。太字体とし[l]音を二重下線（＝）、[r]音を単線（－）でそれぞれ示す〔[r]音の響く箇所は米音の場合とする〕。

Thank you to Gene**r**al John Ke**ll**y, who is doing a fantastic job, and a**ll** of the staff and othe**r**s in the White House, fo**r** a job we**ll** done. **L**ong hou**r**s and Fake **r**epo**r**ting makes you**r** job mo**r**e difficu**l**t, but it is a**l**ways g**r**eat to WIN, and few have won mo**r**e than us !

文字の *ℓ* と *r* がまったく違うように、まったく違う[l]音と[r]音に関し母語話者はごまかしの耳をもっていないわけで、彼らの口腔・鼻腔内はまさに狂いのない精密な機械仕掛け。この機械仕掛け装置が手に取るようにイメージ化できれば[l]音も[r]音も明確に聴取できることにつながるだろう。なお、All right.を['ɔ:l 'rait]とは言いにくいので all は[l]なしで a を二重母音[ou]で代用し['ou 'rait]と言っても不自然には響かないはず。

日本語民族にとって英語音声に関してはこの２音[l]と[r]に徹底的な焦点をあてるのが手早い。They roll their r's.という英語の言い方もあるが、特に米音で支配的に現れる若干巻き舌となる[r]音は特有な響きをかもし出す。外国語修得論(foreign language

acquisition theory)と絡めた脳科学(brain science)としての neurolinguistics（神経言語学）の分野ともなるが、聴覚的に[l]音と[r]音に耳が開いてしまえば他の英音[θ, ð, s, z, f, v, g, ŋ, j, w]などの聞こえ方・響き方の違いも徐々に感知できるようになりもするだろう。

sound（音声）は phoneme（音素）とは違い画一性はない。まして Trump 氏個人の orthography（正字法）からもよく分かるように word stress（語強勢）も intonation（声の抑揚）も流動的で固定していないが、phoneme としての/l/, /r/はすべて画一的となる。

外的な allophone（異音）と内的な phoneme（音素）の関係であるが、まさにそれは本連載(45)で触れた固定していない文字言語でのいわゆる楷書(block style)・行書(semi-cursive style)・草書(fully cursive style)の allograph（異書体）と、固定した grapheme（書記素）の関係とも似ている。上文を 10 人が音声発話すると文字どおり十人十色(individual style of utterance)となるが、確かな発話であればどれも基本的に意味は理解できる。language（言語）と副次的な paralanguage（パラ言語）の関係であり、これは数理での不定積分方程式 $F(x) = \int f(x)dx + C$ の積分定数 C と結びつこう。感情・しぐさ・ジェスチャー・顔の表情・イントネーション・語強勢など個人別発話スタイル(different style of utternance)、通訳や翻訳上のニュアンスの違い等々もこの C として一括説明できるように思える。数学的な structural linguistics が発見した phoneme（音素）、それよりさらに高次の glosseme（言素）(gloss- < tongue)の概念を背景にした見方となる〔なお、C での「しぐさ」に関しては本会 *Year Book,* No.75 (2023)中の拙稿参照〕。

また、定冠詞・不定冠詞・無冠詞・単複の数などを含めた一連の限定度(restrictiveness)に関する問題も仮説的に 1 個の命題 P の意味は $^1/_2$ を底（てい）とする r の指数関数方程式 $P = (^1/_2)^r + \varphi$ [$\varphi \fallingdotseq 1.618$　cf. 1 : 1.618 の黄金比]で示せないだろうか？たとえば「ここの花は青い」という文では「ここ(here)」「花(flowers)」「青(blue)」のそれぞれ３項以外の他を dichotomy（２分割法）により裁断し排除することで全体の意味が１つに定まってくるが、本連載(13), (14), (42)などで扱った generative semantics（生成意味論）での **LCS**（**lexical conceptual structure**：語彙概念構造）とも絡めた筆者自身の ‘Project X’ の一端である〔関連しては拙稿「象徴意味論と BasicEnglish の方法」*News Bulletin* No.63 (2011) GDM 英語教授法研究会／日本ベーシック・イングリッシュ協会、および Ogden-Richards, *The Meaning of Meaning* (pp. 117-118, 279-290)など参照〕。

実践的で実用面からは上の tweet 文が Trump 氏により発話されたものと仮定し、それをすべて文字として transcription する（書き起こす）ことで元の文となるか？であろう。上記、一般に十人十色の発話音声から音素をすくい取りその音声を文字として次々と書き起こせられれば事実上はもう基本的にすべてよしだろう。transcription では話者が笑った箇所は文中で括弧付きの(laughs)とか(chuckles)などと書き起こせばよい。

確認であるが音素 phoneme は structuralism（構造主義哲学）が発見した言語学的「概念」であり、この概念を抜きにすると内的で emic 的(< phoneme)な音素（おんそ）、また外的で etic 的(< phonetic)な音声（おんせい）の「お」の字も言えない理屈となる。

このあたりは本連載(45)でも触れたが、元来は米国ミシガン大学の言語学者 K. L. Pike の見方とも結びつく。さらに、やはり米国の構造主義言語学者 L. Bloomfield 風には音素に関わる emics（特性素論）としての taxotagmemics「談話文特性素論」とも結びつく。本連載(33), (36), (48), (55)でも触れておいたが、研究上での目の付けどころだろう。デンマークの言語学者 L. Hjelmslev 風の glossematics [gloss(= tongue) + ematics]（言語素論 / 言理学）を K. L. Pike 風には glossemics とも言えよう。なお、K. L. Pike は翻訳言語としての hermeneutics（聖書解釈学）でも知られることは特記しておこう。